

バス料金の低廉化による高齢者の行動範囲の拡大と QOL への効果

秋田大学 学生会員 ○安藤 晃太
秋田大学大学院 正 会 員 木村 一裕
秋田大学大学院 正 会 員 日野 智
秋田大学大学院 正 会 員 鈴木 雄

1. はじめに

近年、地方部における路線バスの利用者は減少しており、サービス水準も低下している。秋田市では不採算路線の廃止が相次ぎ、高齢化が進む同市で高齢者のモビリティ、QOL の低下が懸念される。そこで高齢者の外出促進、社会参加と生きがいつくりの支援を目的として、平成 23 年 10 月より 70 歳以上の方が市内のバスを 100 円で利用できる「高齢者コインバス事業」導入した。

本研究ではバス料金の低廉化による交通行動の質的变化を把握する。次に行動が多様化したことと QOL との関連性を確認し、社会政策としての高齢者コインバス事業の有用性を定性的に評価する。

2. 調査概要

本研究では秋田市河辺を対象とした。河辺地区のバス交通はマイタウン・バスと呼ばれるもので秋田市が運行している。本研究で対象とした A コースは延長 17.6km である。マイタウン・バスの起点から秋田駅まではさらに 8.7km ある。調査は 1 週間全便に乗り込み、コインバス利用者（以下 CB）と非利用者（以下 NCB）の 2 種類のアンケートを用意し、乗客に配布した。その結果 CB は配布 82 票、回収 46 票、NCB は配布 60 票、回収 39 票だった。

3. 交通行動の質的变化

コインバス事業の導入による 70 歳以上のバス利用の変化を図-1 に示す。バス利用頻度が増えた人は 58%、行く回数が増えた人は 54%、行くようになったところがある人は 47%を占め、本事業の効果と考えられる。具体的には、ショッピングモールや温泉へ行く回数が増え、いずれも終点であるため運賃が高額であったがより多く行けるようになったと考えられる。また、郊外部から比較的遠い秋田市中心部へ行くようになった人が多く、行動範囲が広がっ

たと考えられる。

図-2 はコインバスを利用する前後での交通手段の変化を示している。コインバス利用後は、バス以外の交通手段がそれぞれ減少していることがわかる。送迎による家族の負担を気にせずに済み、タクシーとして利用していた交通費の大幅な軽減、鉄道と比較して乗り継ぎが容易になったと考えられる。

表-1 はコインバスを利用する前後でバスによる CB のトリップ数の平均値の変化を表している。上段は CB 全体のトリップ数の平均値、下段はバス利用頻度が増加した人のトリップ数の平均値である。コインバス利用後のトリップ数の増加がみられ、バス利用が増加した人は利用前と比較して 1.64 倍（2.9 回／月）と大きく増加していることがわかる。

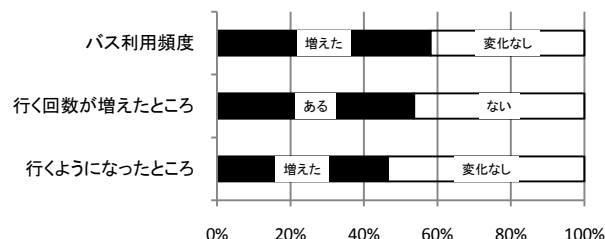


図-1 コインバス導入後のバス利用変化

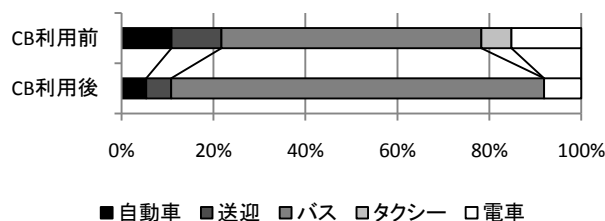


図-2 コインバス利用前後の交通手段の変化（CB）

表-1 コインバス事業導入前後での外出回数の変化（回／月）

	増えた人	変化なしの人	CB全体
利用前	4.5	3.1	3.9
利用後	7.4	3.2	5.5

キーワード：高齢者コインバス事業、秋田市マイタウン・バス、QOL、ICF、Capability Approach

連絡先：〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町 1-1 TEL(018)-889-2368 FAX(018)-889-2975

4. コインバス事業による QOL 等への効果

1) CB 利用者の生活満足度

図-3 は CB 利用者の現在のふだんの生活に満足している人の割合をバス利用の変化別に示している。各項目のグラフの上段は事業導入後バス利用が増えた人、下段は変化がない人である。その結果、「1) 友人に会う頻度」「2) 趣味に費やす時間」「3) 外出する回数」の 3 つの項目でバス利用が増加した人と変わらない人で大きな差が見られた。

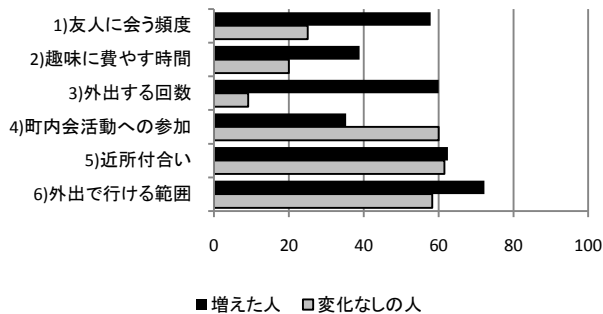


図-3 事業導入後のバス利用変化と普段の生活満足度

2) CB の QOL、 ケイパビリティアプローチ

コインバス事業の評価として、本研究では外出とそれに伴う活動機会の増加だけでなく、その人の生活の質 (QOL) の向上や、さまざまな可能性 (ケイパビリティ) の増加から考察を行った。ケイパビリティ (Capability) とは Amartya Sen が福祉を評価する指標として提唱し、行為の選択可能性を表している。本研究では「コインバスがあることにより考えることができるようになったこと」という付加価値要素について評価した。QOL については国際生活機能分類 (ICF) を参考にした。本研究では「コインバスを利用するようになってできるようになったこと」として QOL 指標を作成した。

図-4 は 1)~11) については QOL に関する項目、12)~15) については Capability Approach に関する項目であり、それぞれ事業導入後のバス利用の変化別に指標が向上している人の割合を示している。この図を見ると、全ての項目でバス利用の増えた人が指標の向上が見られる。QOL について大きな向上が見られるのは「4) 新しい日課ができる」「5) 行かなかったところへ行く」「9) できなかった事への意欲」「11) 新しい仲間」である。新しいことへの挑戦や外出に積極性が出てきており、さらにそれが新し

い仲間も作り出していると考えられる。一方、「6) 趣味活動が増える」「7) 社会的団体への参加」「8) 家族の中の役割」といった項目は QOL の向上は低い。このように項目によって QOL 向上の差はみられるが、全体としてバス利用の増加が高齢者の QOL を向上させることに結びつくことを確認できた。

Capability Approach について大きな向上が見られるのは「14) 一人で外出することが考えられる」「15) 友人に会うことが考えられる」である。ふだんの生活で「友人に会う頻度」の満足度が高かったが、友人に会うと考えられる可能性についても高い向上が見られ、人と接する機会を生み出すことに寄与していると考えられる。

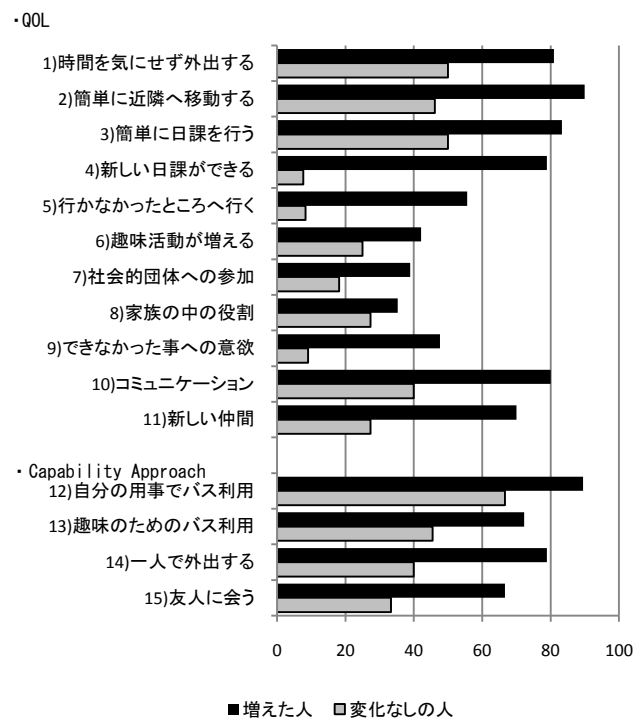


図-4 事業導入後のバス利用変化と QOL、
Capability Approach の向上

5. おわりに

コインバス事業が導入されてから、河辺地区の高齢者の交通行動に変化が見られた。70 歳以上の半数以上がバス利用が増加している。また、秋田市の中心部に行くようになった人もおり、バス利用による行動範囲の広がりも見られる。交通行動の変化に伴い QOL も向上している。行けなかったところへ行くなど積極性を生み出し、それが人とのつながりも生み出している。従って、コインバス事業はこのような郊外部で有用なものであると考えられた。